



井上道義の 未来だった今より

僕は指揮者として50年やってきて「今」を迎えています。13歳までは指揮など考えもしませんでした。どんな人でも、可能性いっぱいの子供時代を経て、何らかの名のつく「しごと」＝役目を持って生きるのが近代の「普通」の人生です。

演歌歌手、寿司職人、農業を営む人、通訳、誰かの妻、指揮者……。何も役目のない人間は、仙人などと名付けるのかもしれない。蟻や貝や鳥のように、「ただの人間」を演じるのは実は大変困難でしょう。

思い出すことがあります。パリで、美しい蝶と蛾（さらに美しかった）が交互に何匹も並べられ、その横に、いくつかの貝殻（一見違いなく見えるが実は分類学的には遠い種類の）が並べられている小さな博覧会を見た時、僕の中から鱗と涙が落ちたのです。すべては名づける側＝人間側のたぶん文化

と呼ぶものの中の問題にしか過ぎない、と。

音楽だけでなく多くの芸術作品、いえ全てのモノは、語られず、打ち捨てられたように扱われれば、人は価値を見いだせない。僕自身、13歳まで「世界の美しさ」を全くわかっていませんでした。ある日、突然学校の朝礼時に、《空は青い＝美しい、木々は緑＝すがすがしい、同級生の女の子＝魅力的だ》と滝に打たれたように感じ、同時に、そんな肯定的な感覚を死ぬまで持ち続ける人間になりたいと願った。滝の側になりたい。何か生命力をぶちまける滝となって生きていきたいと。

それからの社会の動きも含め、13歳の時未来だった「今」を書き続けようと思います。

(オーケストラ・アンサンブル)
金沢音楽監督

◆毎週水曜日に掲載します

13歳「世界の美しさ」感じた